

アダム・スミスの「模倣芸術論」の執筆意図
—舞踊論を中心とした考察

三澤杏亮
(東京大学大学院 博士課程2年)

1. はじめに

本報告では、アダム・スミス(Adam Smith:1723-1790)が「模倣芸術論」の舞踊論において、どのように自身の方法について例証を試みたのかについて、彼の人間本性論にまで遡り、諸著作との関係性を踏まえながら解明する。

一般的に、スミスは古典派経済学者として知られている。しかし、スミスの経済学の背景には、道徳哲学や自然法学、さらには修辞学、天文学、芸術学など広範な知的世界が広がっている。特に、近年では、このようなスミスの経済学における非経済学起源について、それ自体として研究するのみならず、諸著作との関係性を通じて、スミスの方法の全体像の解明を試みる研究動向がある。

しかし、このような研究の潮流を鑑みても、「模倣芸術論」は、十分に理解されているとはいえない。とりわけ、舞踊論に至っては研究の蓄積が相対的に非常に少ないのが現状である。

そこで、本報告ではスミスの研究動向である非経済学起源の一つとして「模倣芸術論」を位置づける。そして、スミスの「模倣芸術論」の執筆意図として考えられる経済学の基礎となる方法論の妥当性を示す人間本性論について考察する。特に、スミスの『哲学論文集』の諸論文のなかでも、完成度が高いとされる「天文学史」における哲学的探求における諸原理と、「模倣芸術論」および編者によって添付された音楽と舞踊の親和性に関する論文において断片的に論じられている舞踊論における人間精神の諸原理の共通性を示す。

2. スミスの経済学の非経済学的起源

スミスの経済学における非経済学的起源において、「模倣芸術論」における舞踊論はどのように位置づけられるのか。スミスは生涯において、『国富論』と『道徳感情論』のわずか2冊のみを出版、改訂し、自身の経済学・道徳哲学の体系を発展させた。その他、スミスが公刊を果たせず生前に焼却された、法と統治の一般理論と文学、哲学、詩および雄弁などに関する哲学史の草稿内容については、後に発見された『法学講義』や『修辞学・文学講義』という学生の講義ノートからわかる。

他方、生前にスミスが遺言執行人に託した諸論文は、彼らが編者となりスミスの死後に『哲学論文集』という遺稿集として出版された。ここでは、「模倣芸術論」をはじめ、天文学や古代物理学、古代論理学、形而上学に関する歴史や感覚論など

に関する諸論文が所収されている。しかし、これらの諸論文の関係性については、不明な点が多いがいくつかの共通性が見られる。

3. スミスの「天文学史」

「天文学史」と「古代物理学史」、「古代論理学・形而上学史」の原題には、“*The Principles Which Lead and Direct Philosophical Enquiries*”について、それぞれの学説史を通じて例証することが共通して示されている。このような観点については、「天文学史」の冒頭で考察した驚異、驚愕、驚嘆をはじめとする哲学的探究を導き指導する諸原理について、最終節の天文学の歴史を通じて例証されていることから明白である。そして、スミスが天文学の諸体系のなかでも、親しみやすい少数の原理を用いて、多くの天体現象の恒常的不規則性の法則的説明を可能とした、ニュートンの天文学体系について、『修辞学・文学講義』におけるニュートンの方法とともに最も高く評価したことが知られている。

4. スミスの「模倣芸術論」

一方、「模倣芸術論」の原題の一部において、“*Of the Nature of that Imitation*”が含まれているように、ここではわれわれの模倣における人間本性とは何か、について考察されていることがわかる。これについて、『哲学論文集』に略伝記を寄せたデュカルト・スチュアート(Dugald Stewart: 1753-1828)も同様に、「模倣芸術論」を諸芸術における人間精神の諸原理として位置づけている。

ここで着目されるべき点は、「天文学史」において詳細に検討された、驚異、驚愕、驚嘆などの諸感情や想像力における観念連合や類似性を性向する傾向性、境遇論などによって「模倣芸術論」の論考が基礎づけられている点である。

5. 結論:「模倣芸術論」における舞踊論の位置づけ

これを踏まえると、「模倣芸術論」第一部の絵画論や彫刻論において論じられている模倣論の背景にある人間本性論をもとに、第二部と第三部における音楽、詩、舞踊という三姉妹芸術論の検討を通じて、ある音楽の速度と拍子の規則性をもとにした舞踊という諸行為を行うというスミスの洞察が導き出される。

したがって、スミスの『哲学論文集』に所収されている諸論文の執筆の背景には、このような哲学的探求や模倣における人間本性とは何かという共通の課題があった。そして、これらの人間本性論にまで遡って、スミスは経済学の基礎となる方法を構築し、これらの妥当性について、さまざまな諸分野の発展と歴史を通じて、例証を試みた可能性を指摘できる。

※参考文献は当日の報告にて示します。